10 月第 5 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 10 月 29 日（日）10：30－11：30　降誕前第 9 主日
■説　教： 保科けい子牧師
■説教題：「 救いをもたらす神の力 」
■聖　書　新約：ローマの信徒への手紙 1 章 16～17 節（新約 p273）
■讃美歌：2「 聖なるみ神は われの集いに 」
　　377「 神はわが砦、わが強き盾、」

昨日10月28日のニュースで、渋谷駅のハチ公像の周辺がフェンスで封鎖され、そこには、「渋谷はハロウィンイベントの会場ではありません」という横断幕がある様子を報じていました。渋谷区長が「来ないで」と異例の呼び掛けをし、大勢の警察官が配置されるなど厳戒態勢が敷かれたようです。しかし、もともとのハロウィンというのは、仮装をして大騒ぎをするようなイベントではなく、キリスト教の万聖節（諸聖徒日とも呼ばれていますが）の前夜祭というところから来ているそうです。現在では、世界的に宗教色は薄れ、万聖節は祝わずにハロウィンのみを祝うことも多いということです。そして、私たちのプロテスタントの教会にとっては、このハロウィンの日は、非常に重要な出来事が起こった日なのです。

キリスト教の暦の「諸聖徒日（All Saints' Day)」は 11 月 1 日で、8 世紀前半に定められました。そして、中世になるとキリスト教では聖人たちを崇拝することが多くなり、諸聖徒日は聖人や殉教者を記念する日になりました。ローマ・カトリック教会では、11 月 1 日の「諸聖徒日」に聖人たちの遺物を展示し、それらを見るために大勢の人々が教会に集まって来ました。それを考慮したのでしょうか。1517 年、諸聖徒日の前日である 10 月 31 日土曜日、当時の神聖ローマ帝国（後のドイツ）のヴィッテンベルク大学神学教授のマルティン・ルターは、ヴィッテンベルク城の教会の扉に「95 か条の提題」を貼り付けました。第 1 条は、「私たちの主であり師であるイエス・キリストが、『**悔い改めよ。**』と言われたとき、彼は信ずる者の全生涯が悔い改めであることを欲したもうたのである。」と書き出されています。ただし、ラテン語で書かれていたように、本来は真剣に神学議論をするためのものだったと言われています。そしてこの日が「宗教改革記念日」と呼ばれるようになったのです。ハロウィンの由来となった「諸聖徒日」の前夜祭と「宗教改革記念日」とは、そのように深い関係があるのです。

ルターの行動には、勿論、当時のカトリック教会が陥っていた有名な免罪符の販売などの様々な腐敗や堕落に抗議するということが中心にありました。しかしその根本にあったのは、「自分はどうしたら神の前に正しい者、義なる者として立つことができ、救い

を確信することができるのだろうか」という深い問いでした。悩みぬいたルターは、人間は自分で正しさを獲得して義となるのではなくて、 神がその独り子イエス・キリストによって罪人である自分を赦して下さり義として下さる、という福音に出会ったのです。彼は、キリストによる赦しの恵みを信じる信仰のみによって、私たちは義とされ救われるのだという福音を、ローマの信徒への手紙の中に見出したのです。そこに、彼の宗教改革に突き進む原点があるのです。つまりこのローマの信徒への手紙が、宗教改革を引き起こし、プロテスタント教会を誕生させたと言ってもよいのです。そして、先ほど読んでいただいたローマの信徒への手紙 1 章 16 節から 17 節に、ルターは「救いをもたらす神の力」である福音を再発見したのです。そういうわけで、ローマの信徒への手紙の第 1 章 16、17 節は、聖書全体の中でも大変重要な箇所です。ここに、キリスト教会の信仰の中心となる事柄が凝縮されて語られているとも言われています。

さて、昨年の 10 月 30 日の主日礼拝でもお話ししたことですが、私が最初にこのローマの信徒への手紙 1 章 16 節から 17 節に出会ったのは、洗礼を受けて 1 年にも満たない 1971 年 10 月 31 日（日曜日）、宗教改革記念日の礼拝説教によってでした。日付まで鮮明に覚えているのは、御言葉にそれほどの強烈な印象を受けたという経験をしたからだと思います。幸いなことに、そのときの説教は活字になっているので、今でも読んで確認することができます。その時、牧師は、カール・バルトという神学者の記した『ロマ書』という書物の中の聖書本文のドイツ語訳を取り上げながら、その独自性は、旧約のハバクク書 2 章 4 節の引用文の訳し方であると説明されました。今、私たちの読んでいる新共同訳聖書では「しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」と訳されています。バルトはそれを「義人は神の真実によって生きる」と訳しました。そしてこれに基づいて、元の言葉では「信仰から信仰へ」という表現ですが、今私たちが読んでいる新共同約聖書では、「初めから終わりまで信仰を通して」と訳されている御言葉を、「(神の)真実から(人間の)信仰へ」というように訳したのだと説明してくださったのです。余談ですが、この先生もまたご自分の訳にこだわりがあり、後に 1991 年 10 月 20 日になさった説教の題は、「真実」という言葉には信仰の信という字を用いて「信実から信仰へ」としています。私のきいた説教は 1971 年 10 月 31 日ですから、それから 20 年の後に再び、その恩師はローマの信徒への手紙を丁寧に語られたのだと思います。『ローマ人への手紙　現代へのメッセージ』という説教集となって出版されています。

1971 年 10 月 31 日の礼拝に出席していた時の私は、聖書の本文であるヘブライ語（旧約聖書）もギリシア語（新約聖書）も、また、カール・バルトの『ロマ書』の原典であるドイツ語も全く分かりませんでした。しかし、それまで信仰とは私のほうから信じることと思い込んでいたのが、神様の「信実」、言い換えれば、神様のほうからのこの私に対する働きかけが先にあって初めて成り立つ、ということに気づかされたのです。私に

とっては、まさにこの時こそが神様に向かって心の向きを大きく回転させられる機会だったのかも知れません。

　ここで聖書の元の言葉をよく読んでみますと、16節は「わたしは福音を恥としない。」の次に「**力　神の**」という順序で、神様の力が先立って記されています。「**力**」の元の言葉の「デュナミィス」はダイナマイトの語源でもあります。そういうわけで、信じる者すべてに救いをもたらす神の力としての福音、言い換えれば、私たちの救い主イエス・キリストの御言葉と十字架の御業が私たちに先立って存在しているからこそ、私たちが全存在をかけて主に信頼して歩むという道が開けているのです。それは、何よりもまず、神様のほうからの私たちに対する働きかけが先にあって、初めて私たちの信仰がなりたつということです。つまり、私たちの「信じる」という行為さえも、あるいは、「聖書を読む」という行為さえも、さらには、使徒パウロの語る「福音を告げ知らせる」という行為さえも、主なる神様の一方的な働きかけがあり、主イエス・キリストの十字架の贖いの業によってそれが保障され、時を超えて常に私たちに寄り添ってくださる聖霊の働きによって、現実のものとして成り立っているのです。使徒パウロも、宗教改革者たちも、あるいは、それに続く膨大な数の信仰者たちも、そのことを深いところで経験させられたからこそ、それを宣べ伝え、生涯をかけて証し続けたのだと思います。そして今、私たちの立川教会でも礼拝がなされているという事実が、主なる神様の力が今なお、私たちの上にも働いているという証明になります。ローマの信徒への手紙を丁寧に講解しているカール・バルトは、1章17節の結びとして「神の真実が人間の信仰に出会うところに、かれの義が現れる。そこにおいて正しい者は生きるであろう。　これがローマ書で問題となっている主題（ザッヘ）である。」と述べています。私たちが今、ささげているこの礼拝においてこそ、まさに「神の真実が人間の信仰に出会うところに、かれの義が現れる。そこにおいて正しい者は生きるであろう。」ということが現実になっていることを、共に確認いたしましょう。それが、今週一週間を歩んでいく私たちへ与えられる「救いをもたらす神の力」です。